

平成 28 年度学校保健統計調査結果

身長体重ともに全国並

—肥満傾向児の出現率 全ての年齢で全国平均を下回る—

府企画統計課生活統計担当

はじめに

この度、平成 28 年度の学校保健統計調査結果がまとまりましたので、その概要をお知らせします。

学校保健統計調査（統計法に基づく基幹統計調査）は、学校保健安全法により各学校が毎年 4 月から 6 月の間に実施している健康診断の結果に基づき、幼児、児童及び生徒の発育及び健康状態を明らかにし、学校保健行政のための基礎資料を得ることを目的として、文部科学省が都道府県を通じて調査を実施しています。

調査対象として抽出された府内の国・公・私立の学校 163 校の幼児、児童及び生徒についての発育状態調査（身長・体重）及び健康状態調査（各種の疾病・異常）の結果を掲載します。

調査対象幼児・児童・生徒数は表 1 のとおりです。

表 1 調査対象幼児・児童・生徒数

（単位：校、人）

区分	調査実施学校数(校)	調査対象者数(人)					
		発育状態調査			健康状態調査		
		合計	男子	女子	合計	男子	女子
幼稚園	33	1,246	626	620	1,963	994	969
小学校	60	5,722	2,866	2,856	28,924	14,704	14,220
中学校	40	4,644	2,325	2,319	20,128	10,510	9,618
高等学校	30	2,578	1,230	1,348	25,171	12,249	12,922
合計	163	14,190	7,047	7,143	76,186	38,457	37,729

注 幼稚園には幼保連携型認定こども園を含む。

発育状態

1 身長・体重の京都府平均値及び全国との比較

平成 28 年度の幼稚園、小学校、中学校及び高等学校の幼児、児童及び生徒の身長及び体重の京都府平均値を年齢別にみると第 1 表のとおりです。（第 1 表、第 2 表）

【身長】

男子は前年度と比較すると、小学校までは前年度を下回る年齢が多いですが、中学校からは、上回る年齢が多くなる傾向があります。各年齢間の身長差は 11 歳と 12 歳の間（8.0cm）が最も大きく、次いで 12 歳と 13 歳の間（6.9cm）が大きくなっています。全国平均値と比較すると、小学校ではほぼ全国平均並ですが、高等学校では全国平均をわずかに上回っています。

女子は前年度と比較すると、中学校までは前年度を上回る年齢が多いですが、高等学校では下回っています。各年齢間の身長差は 10 歳と 11 歳の間（7.0cm）が最も大きく、次いで 9 歳と 10 歳の間（6.5cm）が大きくなっています。全国平均値と比較すると、小学校では全国平均より下回っていますが、13 歳からは全国平均を上回っています。

10 歳及び 11 歳では女子の身長が男子の身長を上回り、9 歳では同値となっています。

【体 重】

男子は前年度と比較すると、上回る年齢が多いですが、動きは小幅なものとなります。各年齢間の体重差は、11歳と12歳の間(6.2kg)が最も大きく、次いで14歳と15歳の間(5.9kg)が大きくなっています。全国平均値と比較すると、中学校までの年齢で全国平均を下回る年齢が多いですが、高等学校ではわずかに上回っています。

女子は前年度と比較すると、前年度を上回る年齢が多いですが、前年度との動きは小幅なものとなっています。各年齢間の体重差は、10歳と11歳の間(5.2kg)が最も大きく、次いで11歳と12歳の間(4.4kg)が大きくなっています。全国平均値と比較すると中学校までの年齢で下回っています。

11歳では女子の体重が男子の体重を上回っています。

2 肥満傾向児及び痩身傾向児の出現率

肥満(痩身)傾向児とは、性別・年齢別・身長別標準体重から求めた肥満度が20%以上(−20%以下)の者のことで、 $(\text{実測体重} - \text{身長別標準体重}) \div \text{身長別標準体重} \times 100$ により計算します。(第3表)

【肥満傾向児】

肥満傾向児の出現率は、男子では15歳(10.00%)が最も高くなっています。女子では11歳(8.46%)が最も高くなっています。

全国の出現率と比較すると、男子5歳、女子の11歳を除くすべての年齢で下回っています。また、男女計では全ての年齢で全国値を下回っています。

なお、女子の8歳及び9歳は全国で最も低い数値です。

【痩身傾向児】

痩身傾向児の出現率は、男子では10歳(3.75%)が最も高くなっています。女子では12歳(5.46%)が最も高くなっています。

全国の出現率と比較すると、男子では10歳、13歳及び14歳で全国平均値より1%以上上回っています。女子では10歳及び12歳で全国平均値より1%以上上回っています。また、男女計では、6歳、7歳、9歳、15歳、16歳を除く年齢で全国値を上回っています(5歳は同値)。

なお、男子の13歳及び14歳は、全国で最も高い数値です。

図1 肥満傾向児の全国比

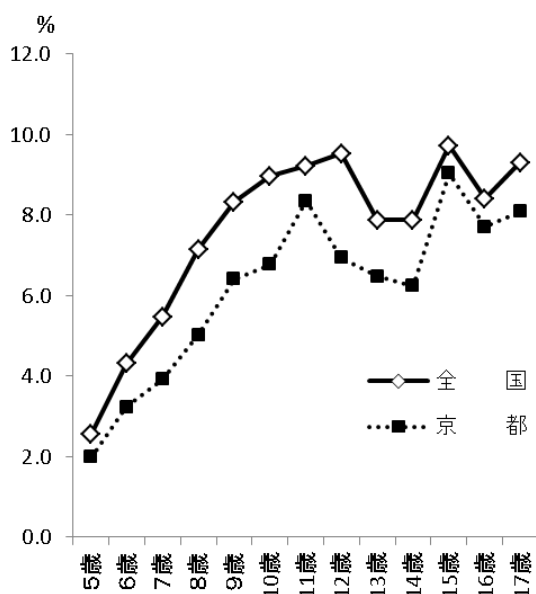


図2 痩身傾向児の全国比

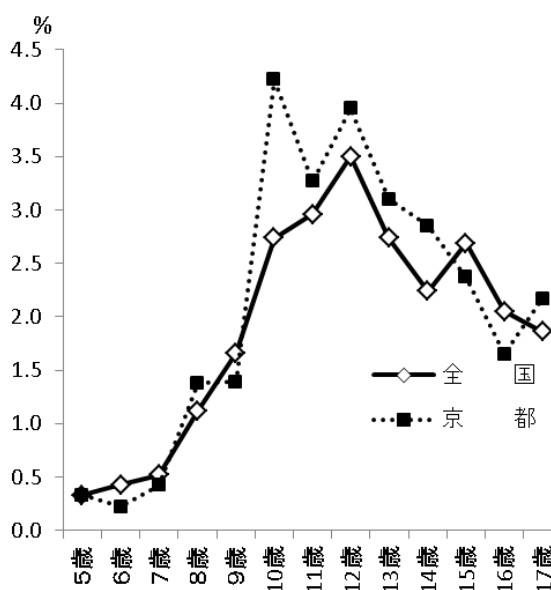


表2 年齢別 肥満傾向児及び痩身傾向児の出現率

(単位：%)

	男子				女子			
	肥満傾向児		痩身傾向児		肥満傾向児		痩身傾向児	
	京都	全国	京都	全国	京都	全国	京都	全国
5歳	2.73	2.68	0.40	0.24	1.22	2.44	0.25	0.44
6歳	2.60	4.35	0.17	0.45	3.90	4.24	0.27	0.40
7歳	5.00	5.74	0.21	0.41	2.78	5.18	0.65	0.64
8歳	5.65	7.65	1.85	1.16	4.35	6.63	0.90	1.07
9歳	8.86	9.41	1.39	1.48	3.84	7.17	1.38	1.86
10歳	7.25	10.01	3.75	2.49	6.27	7.86	4.70	2.99
11歳	8.23	10.08	3.35	2.94	8.46	8.31	3.19	2.99
12歳	8.12	10.42	2.48	2.75	5.70	8.57	5.46	4.29
13歳	7.44	8.28	3.10	2.04	5.49	7.46	3.10	3.47
14歳	5.71	8.04	3.16	1.84	6.75	7.70	2.53	2.67
15歳	10.00	10.95	3.26	3.07	8.09	8.46	1.50	2.30
16歳	8.94	9.43	2.04	2.25	6.47	7.36	1.27	1.84
17歳	8.86	10.64	2.78	2.21	7.34	7.95	1.57	1.51

注：肥満(痩身)傾向児とは、性別・年齢別・身長別標準体重から肥満度を

求め、肥満度が20%以上(-20%以下)の者である。

肥満度=(実測体重-身長別標準体重)÷身長別標準体重×100(%)

京都の太字は全国最小又は最大

(参考) 10年前の体重との比較

今回の調査結果を、10年前の平成18年度の結果と比較すると、男子では7歳、女子は15歳を除く全ての年齢で体重が減少しています(女子は、8歳及び14歳は同値)。男子では11歳、13歳、14歳及び16歳で、女子では13歳で1.0kg以上減少しています。

(参考表) 年齢別体重の10年前との比較(京都府)

(単位：kg)

	平成28年度		平成18年度		増減	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
5歳	18.5	18.1	18.7	18.6	△0.2	△0.5
6歳	21.1	20.8	21.3	21.0	△0.2	△0.2
7歳	24.3	23.1	24.0	23.4	0.3	△0.3
8歳	26.7	26.3	27.0	26.3	△0.3	0
9歳	30.2	29.4	30.5	30.1	△0.3	△0.7
10歳	33.8	33.3	34.5	33.9	△0.7	△0.6
11歳	37.3	38.5	38.9	38.8	△1.6	△0.3
12歳	43.5	42.9	44.2	43.2	△0.7	△0.3
13歳	48.3	46.7	49.7	47.7	△1.4	△1.0
14歳	53.1	49.9	55.6	49.9	△2.5	0
15歳	59.0	51.9	59.1	51.6	△0.1	0.3
16歳	60.6	52.6	62.0	52.8	△1.4	△0.2
17歳	62.6	52.8	63.5	53.1	△0.9	△0.3

3 親の世代(30年前の昭和61年度の数値)との比較

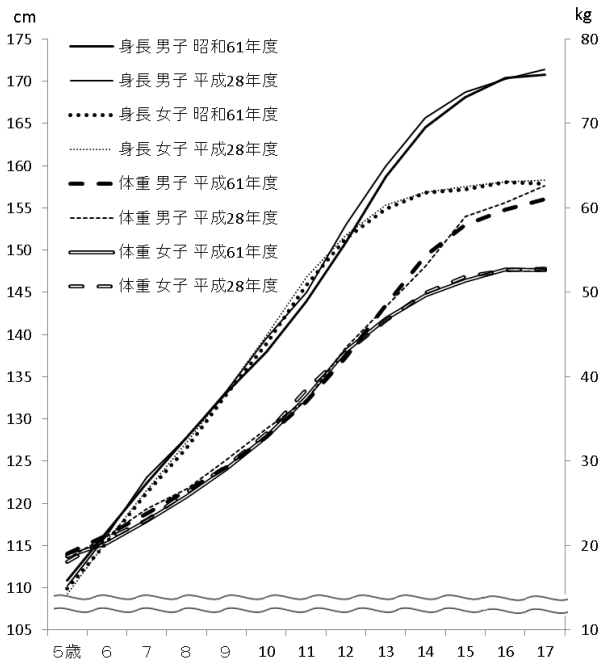
【身長】

平成28年度の身長を親の世代(30年前の昭和61年度の数値)と比較すると、最も差がある年齢は、男子では12歳で親の世代より2.1cm高く、次いで10歳で1.5cm高くなっています。女子では11歳で親の世代より1.0cmと最も高く、次いで10歳で0.9cm高くなっています。

【体重】

平成28年度の体重を親の世代と比較すると、最も差がある年齢は、男子では17歳で親の世代より1.6kg重く、次いで12歳で1.2kg重くまた、14歳で1.2kg軽くなっています。女子では11歳で親の世代より1.0kg重く、次いで5歳で0.6kg軽くなっています。(第4表)

図3 年齢別体格の状況



4 発育量の累計、親の世代との比較

平成10年度生まれの者（平成28年度17歳、以下「子の世代」という。）と昭和43年度生まれの者（昭和61年度17歳、以下「親の世代」という。）の5歳から17歳までの発育量の累計を比較すると、男子は親の世代が身長で0.6cm上回っていますが、体重では子の世代が1.3kg上回っています。女子は親の世代が身長で0.5cm、体重で0.2kg上回っています。（第5表、第6表）

図4 発育量の累計、親の世代との比較（身長）

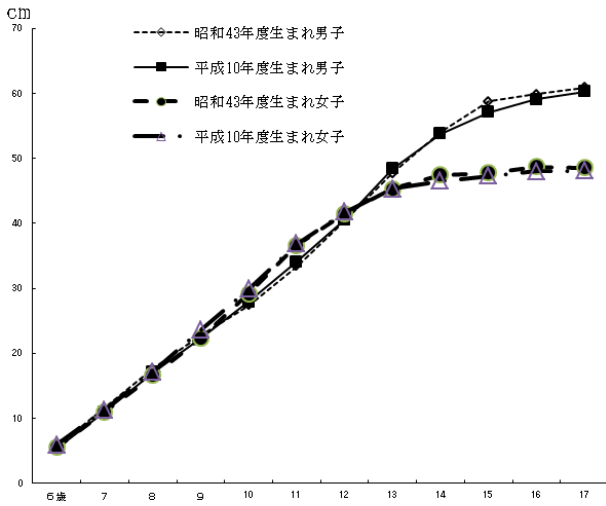
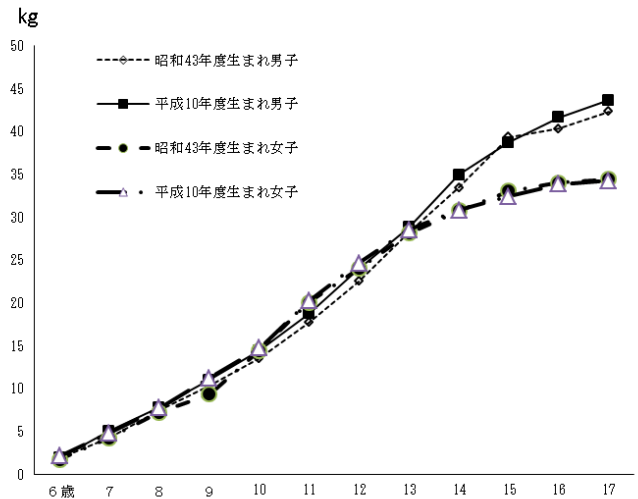


図5 発育量の累計、親の世代との比較（体重）



注：「6歳」は5歳から6歳の発育量、「7」は5歳から7歳の発育量の累計、以下同じ。

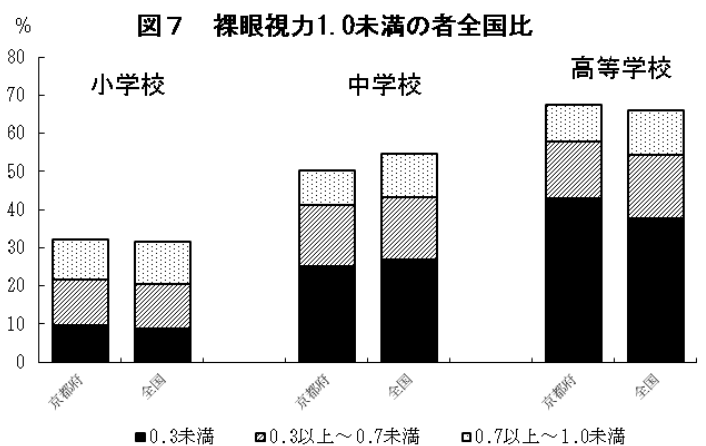
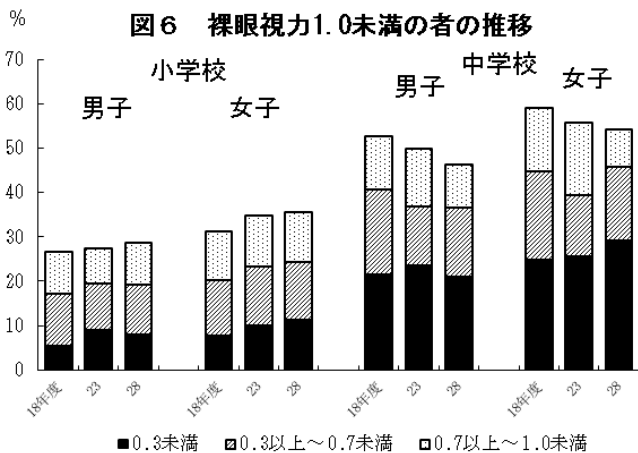
1 疾病・異常の被患率等別の状況

疾病・異常を被患率等別にみると、「むし歯（う歯）」と「裸眼視力 1.0 未満の者」が他の疾病・異常に比べて高く、各学校段階で最高か、それに次ぐ高さとなっています。（第7表、第8表）

2 主な疾病・異常等
【裸眼視力 1.0 未満】

平成 28 年度の「裸眼視力 1.0 未満の者」の割合は、小学校 32.0%、中学校 50.1%、高等学校 67.4%となっています。また、幼稚園は疾病・異常被患率の標準誤差が今年度 5%以上のため非公表となります。前年度と比べると、全ての学校段階で上回っています。5年ごとの推移をみると、小学校では上昇し中学校では減少傾向がみられます。

全国平均値との比較では、京都府は小学校段階、高等学校段階で上回っており、中学校段階で下回っています。また、男子より女子の被患率が上回っています（男子の 5 歳、女子の 14 歳は非公表）。



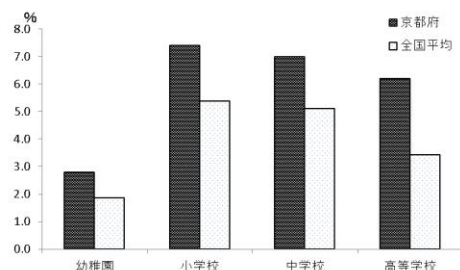
※非公表の裸眼視力 1.0 未満の者の割合については、疾病・異常被患率等の標準誤差が 5%以上、受検者数が 100 人（5 歳は 50 人）未満または回答校が 1 校以下のため統計数値を公表していません。

【眼の疾病・異常】

平成 28 年度の「眼の疾病・異常」の者の割合は、幼稚園 2.8%、小学校 7.4%、中学校 7.0%、高等学校 6.2%となっており、前年度と比べると高等学校を除く学校段階で減少しています。

全国平均値と比較すると、京都府は全ての学校段階で上回っています。

図8 眼の疾病・異常者数



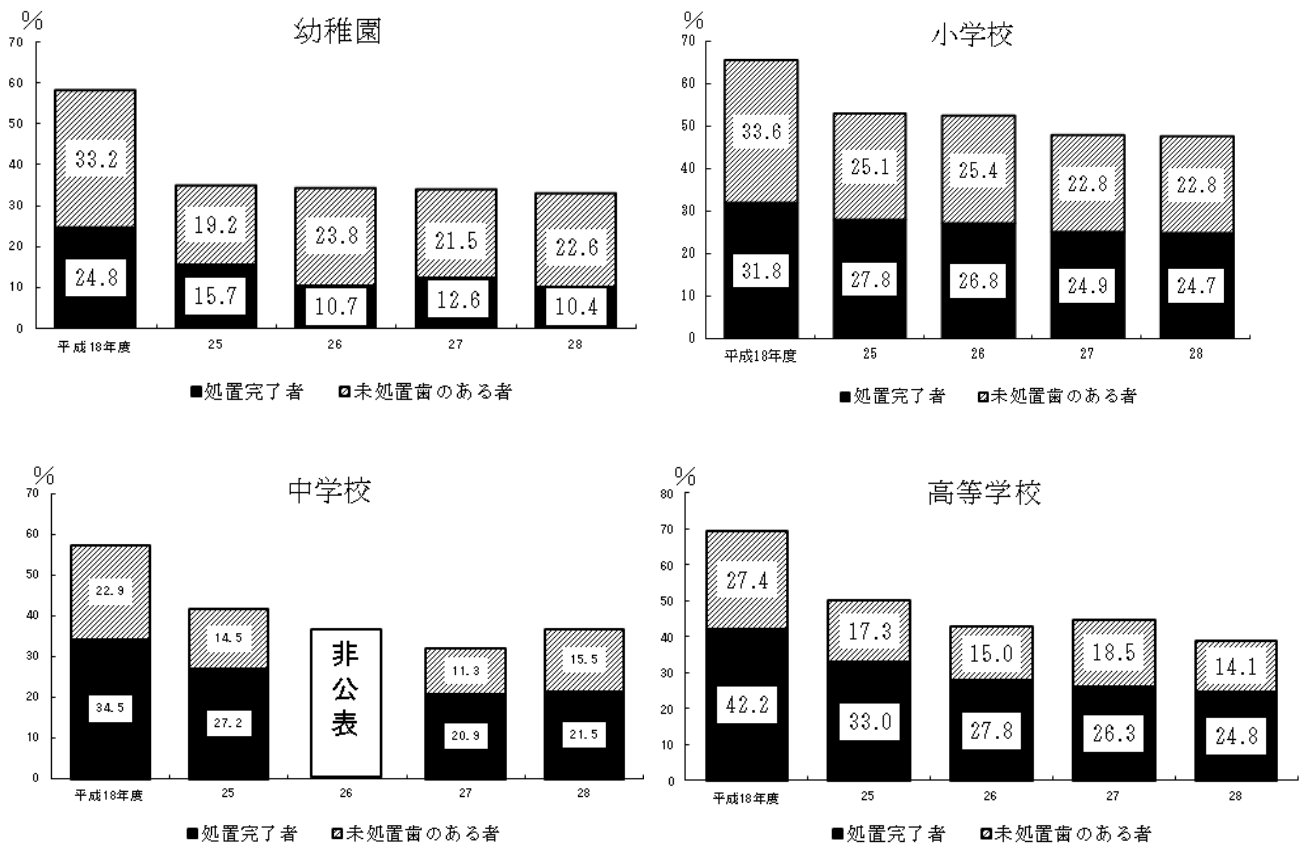
【むし歯（う歯）】

平成 28 年度の「むし歯」の者の割合（処置完了者を含む。以下同じ。）は、幼稚園 33.0%、小学校 47.5%、中学校 37.1%、高等学校 38.9%となっており、前年度と比べると中学校を除く学校段階で低下しています。

10 年前の平成 18 年度と比較すると、平成 28 年度は各学校段階で 17.9～30.7 ポイント低下しています。

全国平均値と比較すると、京都府は全ての学校段階で下回っています。

図9 むし歯（う歯）被患率の推移

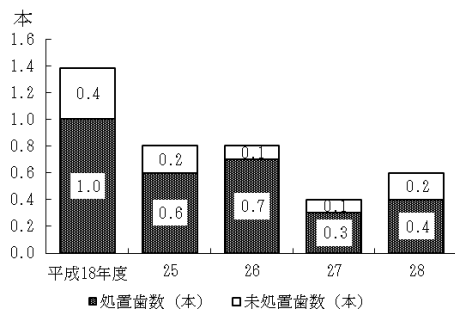


【12歳の永久歯の1人当たり平均むし歯（う歯）等数】

12歳の永久歯の1人当たり平均むし歯等（喪失歯及び処置歯数を含む）の「むし歯」数を見ると、0.7本となっており、10年前の平成18年度と比較すると0.7本減少しています。

「むし歯」数について全国平均値と比較すると、京都府は0.1本下回っています。

図10 12歳の永久歯の1人当たり平均むし歯（う歯）等数



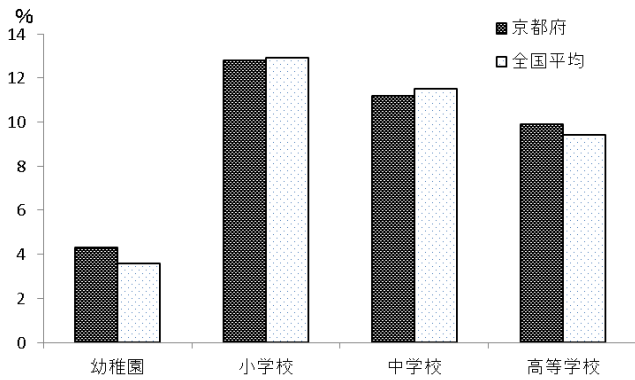
注：端数の関係で内訳の計と合計が一致しない場合があります。

【鼻・副鼻腔疾患】

平成28年度の「鼻・副鼻腔疾患」（蓄のう症、アレルギー性鼻炎等）の者の割合は、幼稚園4.3%、小学校12.8%、中学校11.2%、高等学校9.9%となっています。前年度と比べると、幼稚園以外の学校段階で増加しています。

全国平均値と比較すると、幼稚園段階、高等学校段階で全国値を上回っています。また、京都府、全国平均ともに小学校段階以降改善していく傾向があります。

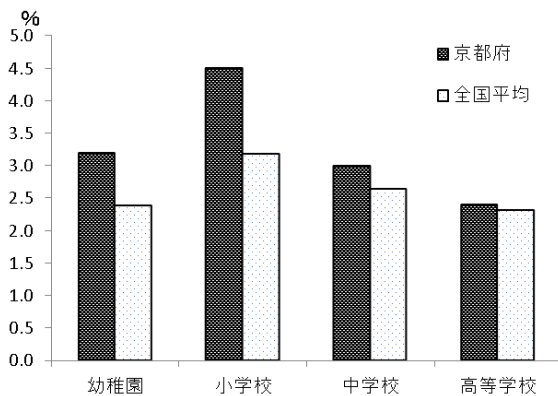
図 11 鼻・副鼻腔疾患全国比



【アトピー性皮膚炎】

平成 28 年度の「アトピー性皮膚炎」の者の割合は、幼稚園 3.2%、小学校 4.5%、中学校 3.0%、高等学校 2.4%となっています。前年度と比べると、幼稚園段階と小学校段階では増加し、高等学校段階では減少しています(中学校は同値)。全国平均値と比較すると、全ての学校段階で全国値を上回っています。

図 12 アトピー性皮膚炎全国比



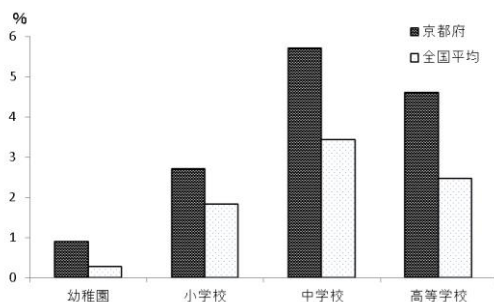
【せき柱・胸郭・四肢の状態】

平成 28 年度より、せき柱・胸郭に四肢の状態が新たに調査項目に加わりました。

平成 28 年度の「せき柱・胸郭・四肢の状態」異常の者の割合は、幼稚園 0.9%、小学校 2.7%、中学校 5.7%、高等学校 4.6%となっています。

全国平均値と比較すると、全ての学校段階で全国値を上回っています。

図 13 せき柱・胸郭・四肢の状態全国比



【ぜん息】

平成28年度の「ぜん息」の者の割合は、幼稚園1.8%、小学校3.5%、中学校2.9%、高等学校1.4%となっています。前年度と比べると、幼稚園段階と高等学校段階では減少し、小学校段階、中学校段階では増加しています。全国平均値と比較すると、中学校を除く学校段階で全国値を下回っています(中学校は同値)。

図14 ぜん息の者の推移

